30. 防災クイズ＆ゲーム Day2024

１　日　程　　2024 年７月７日（日）

２　場　所　　東京臨海広域防災公園　そなエリア東京

３　概　要

２０２４年７月７日、東京臨海広域防災公園　そなエリア東京にて「防災クイズ＆ゲーム Day2024」が実施された。チーム・オレンジの活動内容を説明し、多くの人に知っていただくことができた。その後、オリジナルゲーム「BING（防災アイテム並び替えゲーム）」を行った。積極的に呼びかけを行い、幅広い年代の方に体験していただいた。災害時の行動や道具の有効な活用方法などを考えていただくことができた。またチーム・オレンジの学生スタッフもゲームに参加し、様々な意見を聞くことができ、貴重な交流の機会となった。

ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ　文学部史学科１年　嶌田　夏那

４　学生参加者数　８名

５　参加学生の感想

今回、幅広い年代の一般の方に向けて BING を実施した。それぞれの年代によって何を優先するのか、優先した理由は何なのかなど、多くのことを議論しながら実施することができた。災害時に、どのような道具を使うのが良いのか、何をもって避難をすればよいのか話し合いながら共有できる BING は改めて良いゲームであると感じた。これからも、幅広い年代の人に体験してもらう機会を作り、防災・減災の知識を身につけていただきたいと思う。

ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ　文学部地理学科２年　小林　真聖

一般参加者の方々と一緒に BING をやって、解説しながら自分自身も防災のことを学ぶことができました。このようなイベントに初めて参加したため、皆さんから楽しかったという声を聞くことができて嬉しかったです。特に小さなこどもたちも楽しんでくれたので、BING のような防災ゲームをもっと広めていきたいと思いました。防災のことを学ぶだけでなくイベントに参加している人たちと話をして交流することができたため、このようなイベントの意義を実感し、また参加したいと思いました。

ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ　国際文化学部国際文化学科１年　飯田　みゆき

参加者全員で記念撮影

BING をレクチャーする学生

31. バイタル・プロジェクト× VSP　子ども居場所企画『にっぽり世界うまいもの市』への参加

１　日　程　　2024 年 7 月 20 日（土）、21 日（日）

２　場　所　　日暮里駅前イベント広場

３　概　要

子ども居場所企画は、日頃から本企画の活動にご協力いただいている NPO 法人バイタルプロジェクト主催の「にっぽり世界うまいもの市」にボッチャで参加いたしました。本イベントでは、ボッチャを通じて地域の人々が交流する機会を提供し、また老若男女を問わず、多くの参加者へ交流の機会を提供することができました。今後は今回のイベントを通じて得た経験を活かし、さらに子どもの居場所や地域交流の場を充実させるための新たな活動を企画することで、地域や子どもの居場所づくりの発展へ貢献したいと考えています。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP　キャリアデザイン学部キャリアデザイン学科２年　小林　月琴

４　学生参加者数　５名

５　企画学生の感想

今回のボッチャ企画では対面で地域の人々と交流することができ、とても素晴らしい経験となったこと、また、このような企画に参加できたことを嬉しく思います。良かった点として、休日、夏休みであったことから子供たちや子連れの親子を集客できたことが挙げられます。反省点として、企画当日はかなり気温が高く、日が出ていたため、外出をする人が減っているように感じました。また企画当日は看板や法被など目立った周知ができなかったため、今後の課題だと感じました。次回の企画では課題を改善させ、いい企画に繋げたいです。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP　法学部法律学科１年　堀下　紗歌

今回のにっぽり世界うまいもの市は炎天下で開催されましたが、ボッチャに参加してくれた子ども達は元気な様子を見せてくれました。弟にボールの投げ方を教えてあげるお姉ちゃん、新しいルールを作って楽しむ男の子達、初めましてのみんなでわいわいと楽しむ子達。今回のイベントで企画されたボッチャが様々な形で子ども達どうしの交流の場となったようで、嬉しく思います。次回のこのイベントでも、どのようにしたらたくさんの方々が楽しんでいただけるのか、考えていきたいです。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP　国際文化学部国際文化学科１年　中村　大

バイタルの檜澤さんと吉まぐれ屋の林さんとの一枚

子どもたちとボッチャをしている様子

32. 未来の防災リーダー養成講座

１　日　時　　2024 年７月３０日（火）

２　場　所　　千代田区役所１階区民ホール

３　概　要

2024 年７月３０日、千代田区役所１階区民ホールにて、「未来の防災リーダー育成講座」が実施された。チーム・オレンジは、防災クイズを実施し、多くの子どもたちの防災の知識が深まるものを行った。多くの子どもたちにとって、楽しみながら学べるクイズを行うことができ、とても充実した時間を過ごすことができた。防災のことを教えるだけでなく、地域のつながりの大切さを改めて感じることのできるものであった。

ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ　文学部地理学科２年　小林　真聖

４　学生参加者数　３名

５　参加学生の感想

先日のイベントでは子どもに対する向き合い方を学ぶ事ができた。初めは３回同じクイズを繰り返すだけだと考えていたが実際はそうではなかった。元気な子に対しては時間を気にかけつつ話を聞いてあげ、大人しい子にはこちらから質問を投げかける、といったようにクイズを進行しつつ全体を気にかけることは非常に難しく、大変であったが同時にたくさんの知識や経験を得ることができた。今後子どもと関わる時に活かしていきたい。

ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ　デザイン工学部都市環境デザイン工学科２年　鶴　蓮士

先日のイベントでは楽しく学ぶことと、真剣に学ぶことのバランスの難しさを感じた。
今回参加してくれた小学生の子たちは様々な子がおり、どのように全体の場をリードしつつ楽しく参加してもらえるかを常に意識した。また、保護者の方を巻き込むことによって軌道修正していくことも場をリードしていくことも意識しながら行うことができた。私たちにとっても学びの多い時間であった。またこのような機会があれば参加したい。

ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ　人間環境学部人間環境学科１年　阿部　晴香

楽しみながら防災クイズをする様子

防災クイズをする会場の様子

33. 能登半島沖地震における災害救援ボランティア

１　日　程　　２０２４年8月１９日（月）～２１日（水）

　　8月２２日（木）～２４日（土）

２　場　所　　石川県輪島市

３　概　要

２０２４年8月１９日（月）～２１日（水）に前半隊、２２日（木）～２４日（土）に後半隊という日程で、能登半島沖地震における災害救援ボランティアが実施された。前半隊、後半隊共に２つの班に分かれて作業を行った。前半隊では、がれきの撤去、ブロック塀の運びだしと避難所の設営を行った。後半隊では、ガラスの撤去や、半壊している建物から荷物を出すなどの作業を実施した。今回、２泊３日でボランティア活動を行ったが、復興、復旧はまだまだ遠いと多くの学生が実感した。これから何度でも、現地での活動をしていきたいと考えるとともに、現地ではなくてもできる活動はあるのではないかと感じた。

ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ

文学部地理学科２年　小林　真聖

４　学生参加者数　29名

５　感　想

報道と現実のギャップを感じた３日間だった。80-90%以上断水解消という報道があっても、個々の家では未だに、半数以上が解決していない現状に驚いた。７ヶ月が経ちメディアで取り上げられる機会も減った今、積極的な情報収集が必要だと学んだ。活動内容はブロック塀の解体・粉砕などで、企業の方や一般ボランティアの方々と共同で作業を進める中で、コミュニケーションの大切さを再確認した。また、依頼主の方や女将さん、バスの運転手さんなどから色々なお話を聞き、貴重な経験をさせていただいた。これを周りにどうつたえるべきなのかを考え、行動していきたい。

法学部法律学科３年　後藤　元香

能登半島沖地震の災害救援ボランティアを通じて、被災地の現状と復興の困難さというものを体験した。震災から半年以上経過しても、倒壊家屋や目に見えない被害が残る現実に直面し、長期的な支援の必要性を痛感した。同時に、ボランティア同士の協力や役割分担の重要性も学んだ。作業は困難が伴うものもあったが、少しずつ復興貢献できたという達成感は大きな励みとなった。この経験を通じて、災害への備えや継続的な支援の重要性を再認識し、今後の防災意識や社会貢献活動に活かしていきたいと思う。

法学部政治学科２年　齊藤　直哉

崩れたブロック塀を集める学生

避難所を清掃する学生

休憩時間中に依頼者の話を聴く学生

本を整理する学生

ブロック塀や瓦を集める学生

反省会をする様子

集合写真（前半隊）

集合写真（後半隊）

34. レッツボウサイフェス

１　日　程　　２０２４年8月２５日（日）

２　場　所　　東京都台東区

３　概　要

２０２４年８月２５日、台東区にて、NPO 法人防災コミュニティネットワーク主催「レッツボウサイフェス」が開催された。チーム・オレンジからは１５人が参加した。子供たちに防災を身近に感じてもらうために起震車や、消火体験などさまざまなことに取り組んだ。チーム・オレンジからは「BING（防災アイテム並び替えゲーム）」を実施し、子供たちに身近なものが災害時に役立つことを知ってもらいながらゲームを楽しんだ。最後に、バケツリレーを行い、火事が起きた際の協力の大切さを学んだ。また、災害が発生する前から地域住民の協力の大切さを感じたイベントであった。　　ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ　文学部地理学科２年　小林　真聖

４　学生参加者数　１５名

５　参加学生の感想

水風船を作ったり、起震車に乗ったり、AED を実際に使用したり、バケツリレーを行ったりと普段日常では行えないことを沢山経験出来ました。特に印象に残ったのは起震車です。震度７の地震が起こった際の映像やどのような被害が出るのかは見聞きしました。しかし、自分がその揺れを体験したことは無かったので立つことはおろか、机の脚に掴まって自分の頭を守ることすら難しいことを今回知ることができました。　　ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ　法学部政治学科２年　川島　里奈

楽しく防災を学び防災意識を高めるという、今回のようなイベントを実施し、パワーと新しい発想をもった若い人たちを巻き込んだ災害に強い地域づくりを行っていきたいです。会長やレッツボウサイの代表とお話をした際に特に危機感を覚えた点が、防災訓練などの防災イベントへの若者の参加率が低いということです。幅広い世代へのアプローチと世代間のコミュニケーションが十分にできていないという現状を改善していきたいです。この問題をどのように解決していくのか。まだ今の自分にはその答えがわかりませんが、これからチーム・オレンジを通して色んな防災イベントに参加し、自分なりの答えを探っていきたいと思います。

ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ　人間環境学部人間環境学科　１年　藤原　あやめ

AED 体験

参加者で集合写真

35. 編み物×多世代交流企画

１　日　程　　８月29日（木）

２　場　所　　千代田区かがやきプラザ１階　ひだまりホール

３　概　要

近年、地域社会のつながりが薄れ、特に高齢者と若者の交流が減少していることが問題視されている。異なる世代が交流することで、新たな価値観を学び、地域全体の活性化につながると考えられる。また、若者の間でインフルエンサーの影響や寄付された作品が被災地で関心を寄せられたことを契機に、編み物が注目され始めている。本企画では、編み物を通して、初心者にも楽しみながら学べる場を提供し、高齢者・学生・子どもといった世代を超えた交流を設けた。企画をきっかけに地域社会の結束を強め、多世代が編み物を通じて地域に親しみを持てるようなコミュニティを提供できた。　　ボランティアセンター学生スタッフ VSP　経営学部経営学科２年　山内　万結子

４　学生参加者数　９名

５　企画学生の感想

編み物自体初心者という方も、編み物に慣れている方もいらっしゃり、自然と初心者の方にベテランの方が教えるという形ができて、企画学生や協力団体の方々を含めた参加者全員が和気あいあいとした雰囲気の中、編み物を通して交流ができたと感じました。また、普段、ご年配の方や小学生と接する機会は少なく、今回の企画を通して幅広い年齢層の方とお話しできたことで新しい価値観や考え方にも触れることができた素敵な機会でした。　　ボランティアセンター学生スタッフ VSP　経営学部経営学科２年　山内　万結子

６　参加者の感想

・とてもやさしく説明と進行をしていただき、楽しく充実したひと時でした。（60 代女性）
・楽しかった。かわいいお弁当とポシェットができました。（小学生）
・学生さんと楽しくお話ししながら編み物できました。また、参加したいです。（60 代女性）
・子どもでも楽しめてよかった。色々作れてよかった。時間があっという間で、続きは家で編みます！（40 代女性）

多くの地域の方にご参加いただきました

編み物を通じて交流が深まりました

36. 東北被災地ボランティアツアー

１　日　程　　２０２４年9月3日（火）～5日（木）

　　9月１０日（火）～１２日（木）

２　場　所　　１日目：宮城県石巻市

　　２日目：岩手県釜石市・大槌町

　　３日目：岩手県陸前高田市

３　概　要

２０２４年9月3日（火）～5日（木）に第５３次隊•第５４次隊、9月１０日（火）～１２日（木）に第５５次隊・第５６次隊という日程で「東北被災地ボランティアツアー」が実施された。初日は、西城楓音様、佐藤敏郎様に講話をいただき、震災遺構門脇小学校、大川小学校の見学をした。「大切な人を守るために私たちは何をすることができるのだろうか」というテーマを設定し、自分の身近な大切な人の命の大切さを学んだ。２日目は、宝来館、吉里吉里国にて、「復興とは何か」というテーマを設定し、岩崎様、松永様に講話をいただき、山道整備、海岸清掃、薪割りを実施した。３日目は、「震災を次の世代の世代に繋ぐ架け橋になる」というテーマを設定し、陸前高田市立高田一中学校で交流会を行った。震災から１３年が経ち、今回のボランティアツアーは震災について学び、次の世代への懸け橋になることを目的に行った。今までのものに比べ、体を多く動かすだけでなく、自分が軸となり、災害に対して大切な人や次の世代にどれだけ災害に対する「備え」をできるかというものを強く意識することのできるものであった。

ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ　文学部地理学科２年　小林　真聖

４　学生参加者数　３９名

５　参加学生の感想

今回私が参加してかなり驚いたのが、多くの地元の方々が今後の目標や課題について真剣に考えられていたことです。震災を過去のものとして終わりにするのではなく、はたまた悲劇の出来事として目を背けるのでもなく、「これからどうしたいか」を一心に考えられている姿に心を打たれました。 佐藤さんがおっしゃっていた「希望の防災」や宝莱館の女将さんがおっしゃっていた「死なない街づくり」など被災した方々は多くの辛い経験をしてきたからこそ、それを繰り返さぬようできることは全てやろうとしていました。それに対して、私たちにできることはこの震災をいつまでも忘れずにずっと考え続けることだと思います。以前であればそんな些細なことに意味があるのかと思ってしまったかもしれませんが、今回様々なお話を聞き、これが何よりも難しいことであり、また私たちに求められていることだと思いました。

人間環境学部人間環境学科１年　伊藤　優希

実際に現地に訪れて講和や建物、景色を見ることで、テレビなどでは得られないことを経験することができました。思ったよりも津波が高く強く町を襲ってきたのだと身にしみて感じました。私は埼玉県に住んでいるので、どこか津波は来ないから大丈夫だ、と思っていたところがあったのですが今回のツアーを通して災害の恐ろしさをとても感じたので、家族や周りの人に経験したことを伝えその上で万全な備えをするべきだと改めて思いました。

経営学部経営学科１年　加藤　綾音

今回、東北被災地ボランティアツアーに参加して自分の防災意識を高めることができました。今まではどこか他人事のように感じていた東日本大震災を非常に身近に感じるようになりました。特に印象に残ったのは、震災以降大川小学校の見学です。自分自身、大川小の名前を聞いたことがあったのですが、実際訪れると、津波の力というものを肌で感じました。津波によってなぎ倒された校舎の連絡通路は、特に印象的でした。佐藤敏郎さんのガイドもあったため、当時の子供たちや先生方がどのような思いで時を過ごしたのかを考えると、とても胸が痛くなりました。どうしてすぐに山に逃げる判断ができなかったのかということを考えると、つらい気持ちになります。また、避難を決めてから、一人しか通れない小さな門から必死に逃げた経路を私が実際にたどってみたときは、この思いを絶対に共有しないといけないと

強く感じました。津波を目の前にしたときにどう思ったのかを想像するだけでとてもつらいのですが、この時のことをしっかり伝えていくことが風化させない一番の近道だと思います。

人間環境学部人間環境学科１年　松本　周汰

薪割り体験をする学生

吉里吉里国での集合写真（前半隊）

中学生に BING をレクチャーする学生

海岸清掃をする学生

37. フードロスヘキサゴン３ ～食材の皮まで使うエコクッキング！～

１　日　程　　2024 年９月６日（金）

２　場　所　　千代田区役所神保町区民館 調理室

３　概　要

身近なフードロス削減の方法を楽しく学ぶことを目的として、2022 年に実施されたフードロスヘキサゴン２に引き続き本企画を実施しました。当日は参加者が３チームに分かれ、野菜くずを煮詰めたベジブロス入りカレー、にんじんの皮を使ったチヂミ、じゃがいもの皮チップス、キャベツとにんじんの使い切りサラダを作りました。そして、参加者全員で試食をしました。メニューは普段なら捨ててしまう食材の一部が活用されているものを選び、企画者側で当日の食材が使い切れるように材料の種類や量を調整したものを用いました。調理中には、「キャベツの青い葉や芯もベジブロスに使えるのではないか」などといった声もあがり、食材を捨てない工夫を参加者が主体的に考えている様子がうかがえました。各チームの円滑なコミュニケーションと積極的な動きにより、短い時間内でどの料理も大変美味しく仕上げることができました。普段は捨ててしまう野菜の皮や芯などを余すことなく使う調理体験を通して、家庭でできるフードロス削減の工夫を学ぶ良い機会になったと感じます。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP　文学部心理学科３年　丸茂　綾音

４　参加学生数　９名

５　企画学生の感想

今回の企画では参加者に生活のなかで生まれるフードロスが美味しい料理の一つになり、削減できることを知ってもらうこと、そしてフードロスを削減するためにどのように行動を変えるべきか考えてもらえる企画にすることを心掛けました。本企画は活動時間が短く、効率を上げるために３グループに分かれて料理を行いました。企画当日まで時間通りに進むか不安でしたが、実際は企画者を含め参加者が進行状況に合わせてグループを移動して料理を行い、臨機応変に動いたことで予定時間より早く料理を完成させることができました。その結果、食事の時間を多く確保することができ、参加者同士の親交をより深められました。料理のやり方ひとつでフードロスを削減できることを知るきっかけになったと思います。　　ボランティアセンター学生スタッフ VSP 文学部心理学科２年　黄金井　菜名

６　参加学生の感想

今回の企画を通して、普段捨ててしまう野菜の皮や野菜くずで様々な料理が作れることを学べました。

今回のメニューは他の料理を作る過程で出たもので作ったとは思えないほど美味しく、また簡単に作れたのでこのようなメニューを広めていきたいです。芯やヘタなど直接食べられないものでも出汁をとることで利用出来るのは新たな発見でした。当日は、企画者、参加者関係なくみんなで協力しながら楽しく調理ができて良かったです。しかし、調理の過程でごみは一切出ませんでしたが、食べ残しが少し出てしまったことが反省点です。　　ボランティアセンター学生スタッフ VSP　デザイン学部建築学科１年　村田　秋花里

キャベツと人参の使い切りサラダを盛り付ける様子

完成したお料理

38. 麹町消防少年団×チーム・オレンジ交流企画

1　日　程　　2022年９月８日（日）

2　場　所　　麹町消防署

3　学生参加者数　６名

4　概要

麹町消防署にて、消防少年団の子供たちと一緒に活動をした。まずは小学生向けに、オリジナル防災ゲームである「BING」を実施した。災害時に活用できるアイテムを考えることができる防災ゲームである。そしてその後、今度は中高生向けにクロスロードを実施した。この２つのゲームを通じて、防災に役立つ知識を身に着けてもらうとともに、子供たちとの交流も図ることができた。

ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ　キャリアデザイン学部キャリアデザイン学科３年　　山本　真聖

5　参加学生の感想

今回、小学生から高校生の子どもたちと防災ゲームをした。普段は大人の方や大学生を相手に防災ゲームを持ち出すことが多かったため、ゲームがうまくいくか心配であったが、子どもたちは和気あいあいとゲームをしている様子だった。もともと防災ゲームを用いた活動の目標が、「幅広い人たちに防災知識を身に着けてもらいたい」というものであった。今回小さな子どもたちにもゲームを楽しんでもらえることが実感できたため、今回の企画はとてもやりがいのあるものになった。

ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ　キャリアデザイン学部キャリアデザイン学３年　岩田　淳之介

私は主に麹町消防少年団の中高生の方たちとクロスロードを行った。ここでは一人一人が自分だったらどうするか真剣に考えながら活発な話し合いをしている様子であった。特に私たちが事前に用意していた考えとは異なる視点を持つ方もおり、豊富な発想力を使って考えていただく機会になったのではないかと感じた。麹町消防少年団との交流を通して、改めて防災について知識や考えを身につけてもらう機会の重要性を実感した。　　ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ　法学部政治学科３年　毛塚　雅人

クロスロードをする様子

BING をする様子

39. 琵琶湖の環境保全～琵琶湖ツーリズム！ 大学生で考える環境ボランティアの未来 2024 ～

1　日　程　　オンライン講座、事前説明会　2024 年９月 13 日（金）

2　場　所　　Zoom

3　概　要

関西大学主催ボランティアイベント「琵琶湖の環境保全～琵琶湖ツーリズム！ 大学生で考える環境 ボランティアの未来 2024 ～」に昨年に引き続き参加させていただきました。本イベントは９月 13 日（金）にオンラインにて開催され、本学から２名、関西大学から９名、明治大学から３名、合計 14 名の学生が受講しました。前半には滋賀県立琵琶湖博物館特別研究員の中井克樹氏に登壇いただきました。今回は琵琶湖の環境保全（特に侵略的外来生物への対策）をテーマにご講演をいただき、琵琶湖の環境保全の現状を学びました。後半はグループディスカッション、そして交流会を行いました。オンラインではありましたが他大学との交流は良い刺激になったのではないかと思います。市ヶ谷ボランティアセンターは今後も関西大学と連携をして合同ボランティアを実施していきたいと考えています。

4　学生参加者数　13 名（法政大学２名、関西大学９名、明治大学２名）

5　参加学生の感想

大学の講義で侵略的外来種を知り、興味をもったので参加した。外来種は人力の対策イメージがあったため、スウィング・ヤーダといった機械による対応をしれて興味深かった。オオクチバスとブルーギルを一緒くたにして害だと考えていたが、環境への影響はそれぞれ異なり、それを踏まえた対策が必要だと思った。　法政大学社会学部　４年

具体化できない数字を聞いて外来生物の強い生命力を感じた。外来生物も生物であることに変わりはなく、「悪い生き物というのはいない」という中井先生の言葉が印象に残りました。　関西大学法学部　４年

ボランティアに参加したことがなく、ボランティア活動の内容を知りたいと考えたため受講した。外来種を多く駆除するだけでは環境問題の解決に至らないことを知ったことが勉強になった。　法政大学法学部　４年

大学の授業で自然に関するものを取っており、環境保護について興味があった。外来種の全てが悪い影響を環境に与えるのでは無いと知り、非常に勉強になった。　明治大学商学部　１年

企画終了後の集合写真

40. 漁業体験企画

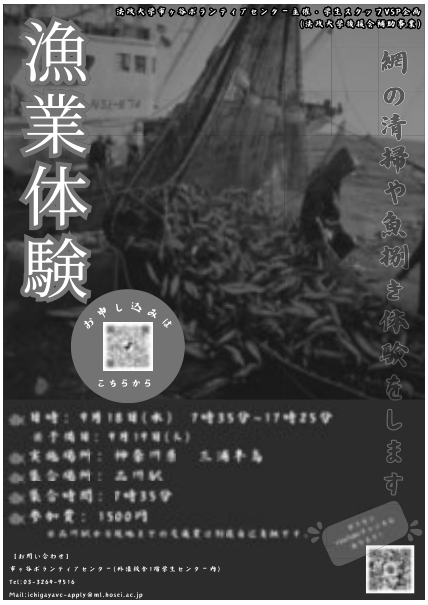
１　日　程　　2024 年９月 18 日（水）

２　場　所　　神奈川県　三浦海岸

３　概　要

人々は海から多大な恩恵を受けてきました。海のおかげで成された生活や文化があることは確かでしょう。ところが近年では、海への関心が低下しており、尊重する意識が薄れつつあります。私たちは、このことが環境問題の原因の一部であると考えました。そこで、実際に現地へ赴き、海と常に向き合っている漁業の現場に触れることが、関心を再度深めるのではないかと期待し、今回のボランティア活動を企画しました。本企画には、漁業に使われる網や浮きの掃除をしたり、魚を自らの手でさばいたりなど、参加者が身をもって学ぶことができる、体験型のボランティア活動の意が含まれています。参加者同士で感想を共有できるような環境での活動であったことにより、参加者が今回のボランティア活動で得たものはより意義のあるものになっているのではないかと思います。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP　経営学部経営学科２年　山田　悠仁



４　学生参加人数　20 名

５　企画学生の感想

今回の企画を通して、漁業の現場の雰囲気に触れることで、今までは消費者側からしか見ることのできなかった魚文化を、供給者側の視点で捉えることができたのではないかと感じます。漁業と言われて想像するのは、漁師さんが沖合に出て魚を引き揚げる様子ですが、今回現場でみた漁業は魚を引き揚げるまでにかかる見えない手間や漁業そのものを維持するために必要な労力でした。今回の活動は日常では決して得ることのできない貴重な経験だと思います。改めてこういった活動に関わることの大切さを感じました。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP　経営学部経営学科２年　山田　悠仁

６　参加学生の感想

漁業関係の企画に参加をして、漁業で必要な道具や専門的な知識を学ぶことができました。清掃活動では網に張り付いた貝を取り除く作業を行いました。思ったよりも大変な力作業であり、漁師の方々がいつも行っていると聞いて驚きました。魚さばき体験では実際にマグロをさばく作業を行いました。初めてということもあり、かなり苦戦はしましたが、漁師の方々が細かく丁寧に教えてくださったおかげで少しですが、さばきの作法を習得できた気がします。また、機会があればぜひ参加したいです。

デザイン工学部都市環境デザイン工学科３年　古賀　大善

網掃除をする学生

船の掃除をする学生

浮きを掃除する様子

魚捌き体験

41. バイタル・プロジェクト× VSP 子ども居場所企画『にっぽり世界うまいもの市』への参加

１　日　程　　2024 年９月 21 日（土）、22 日（日）

２　場　所　　日暮里駅前イベント広場

３　概　要

子ども居場所企画は、日頃から本企画の活動にご協力いただいているNPO 法人バイタルプロジェクト主催の「にっぽり世界うまいもの市」にボッチャで参加いたしました。本イベントでは、７月に参加した時と同様に、ボッチャを通じて地域の人々が交流する機会を提供し、また老若男女を問わず、多くの参加者同士の交流の機会を提供することができました。今後は得られた経験を活かしながら、さらに子どもの居場所や地域交流の場を充実させるための活動へと改善していくことで、地域や子どもの居場所づくりの発展へ貢献したいと考えています。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP　キャリアデザイン学部キャリアデザイン学科２年　小林　月琴

４　企画学生参加者　５名

５　企画学生の感想

今回のボッチャ企画では、７月に行った時の反省を活かし活動することができました。前回の反省であったイベントの周知を活性化させる点では、法被を着用するようにしました。その結果、子供達や法政の卒業生の方に声をかけていただくことができ、前回よりも集客できていたので良かったです。暑さが９月に入ったことで和らぎ、比較的屋外でも過ごしやすくなった点も良かったです。反省点として、さらに企画を認知していただくために、企画内容を書いたボードを設置する案が出ました。この反省を活かし、次回に企画運営に繋げていきたいと考えます。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP　法学部法律学科１年　堀下　紗歌

今回も、７月に引き続き、「にっぽり世界うまいもの市」にて、ボッチャ体験のボランティアをさせていただきました。前回に比べて、過ごしやすい気候になったからか、多くのお子さんやその親御さんが楽しそうにボッチャを体験してくださいました。また、有料だと思われ、通り過ぎてしまう方がいらっしゃったり、今回のボッチャイベントに参加してくださった方の中に海外の方が少なかったという点も改善していきたいと思いました。企画メンバーで話し合い、様々な方が参加してくださるより良い企画になればなと考えています。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP　国際文化学部国際文化学科１年　中村　大

様々な世代の方にご参加いただきました

ボッチャ体験の様子

42. 秋の献血企画

１　日　程　　2024 年 10 月３日（木）、10 月４日（金）

２　場　所　　富士見坂庭園

３　概　要

2024 年 10 月３、４日に、日本赤十字社の方々と共同して献血企画を実施いたしました。前回行った春の献血企画と同様、多くの方々に献血にご協力いただきました（130 名）。献血にご協力くださった皆様、本当にありがとうございました。ボランティア、特に献血は少しハードルが高いもののように感じてしまうと思います。そのため、今回の献血企画で、なかなか献血に対して勇気が出なかった方々も、ぜひこの学内での献血という良い機会を活かして、「知らない誰かの役に立つ」という経験をしていただければ、私たちもうれしく思います。私たちも、どのようにしたらより献血に対するハードルが下がるのかを考えていきたいです。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP
国際文化学部国際文化学科１年　中村　大

４　参加人数　学生参加者数 130 名（献血者数は 75 名、55 名は献血できず）

５　企画学生の感想

キャンパス内に献血バスが来ることで、普段は献血になじみがない人でも、献血をする機会になると思います。呼びかけをしている最中でも、「少し怖いけど、誰かのためになるならやってみようかな」や「景品が欲しいからやる」と興味を持って下さる方も多く、うれしかったです。たとえ景品が目当てであったとしても、献血をして誰かの役に立つことには変わりありません。少しでも多くの人が献血をするきっかけが生まれるように、この活動を続けたいと感じました。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP　文学部日本文学科２年　大江 千歳

６　参加学生の感想

前日は血圧が低かったため出来ず、待つだけ待って向こうのお時間を無駄に頂いてしまったので、メール情報だけでなく、元々血圧が高くない場合は一食も抜かないよう自己判断すべきだったと反省しました。今日は身体が冷えており針を刺す血管が見えづらくなっていたようでしたが、時間をかけて探して下さり、最終的にはしっかり献血が出来て良かったです。採血の準備をしている間も穏やかに話しかけて下さって、緊張せず出来ました。

献血の呼びかけをする学生スタッフ

富士見坂庭園の様子

43. 千代田区男女共同参画センター　第12回MIW祭り

１　日　程　　2024年10月５日（土）

２　場　所　　千代田区役所１階　区民ホール

３　概　要

今年はフランスで７月から９月にかけてオリンピック・パラリンピックが開催されましたが、世間においてのパラリンピック種目の知名度はまだあまり高くありません。そこでボランティアセンター学生スタッフVSPは、パラリンピック種目をたくさんの方に体験してもらい存在を知ってもらうという目的で、千代田区男女共同参画センターMIWが主催するMIW祭りに昨年度に引き続き今年も参加させていただき、ボッチャの紹介・体験を行うブースを出展しました。小さい子どもたちにもわかりやすいように１対１の個人戦とし、ジャックボールから遠い方のチームがボールを投げるのではなく、両チーム交互にボールを投げるとして、ルールを単純にしました。子どもたちはもちろん、大人の方々もたくさん体験しに来てくださいました。どの年代の方々も、ジャックボールの近くに上手くボールを投げることができたり相手に自分のボールを攻撃されたりしたときに、声を上げて盛り上がっている姿が印象的でした。また、ボッチャの体験を気に入って何度も来てくれる子どもたちもいました。　　ボランティアセンター学生スタッフVSP　人間環境学部人間環境学科１年　清澤　夏輝

４　学生参加者数　４名　一般参加人数27名

５　参加学生の感想

小さい子どもから年配の方まで幅広い年代の方々と関わることができて、とても良い経験になりました。子どもたちが今回のイベントに参加したことにより、ボッチャというあまり知られていないスポーツについて幼い頃からその存在を認識してもらう機会を提供できたことで、私たちにとってとてもやり甲斐のある企画になりました。他大学のボランティア団体の学生とも交流を持つことができて、VSPの活動の幅をより広げることができたと思います。　　ボランティアセンター学生スタッフVSP　人間環境学部人間環境学科１年　清澤　夏輝

小さい子どもたちと関わる機会があまりないため、今回のMIW祭りに参加したことで、子どもだけでなく色々な年代の方々とボッチャを通して交流の輪を作ることができ、普段味わうことのできない体験を味わうことができました。大学内だけでなく、千代田区の地域住民の方々と触れ合うことができ、法政大学が掲げる「実践知」へのアプローチにも繋がる機会になったのではないでしょうか。これを機に、VSPも様々な世代の方々との交流の輪を広げていきたいと感じました。

ボランティアセンター学生スタッフVSP　人間環境学部人間環境学科１年　大平　夏実

目線を合わせて説明する様子

集合写真

44. 防災・減災セミナーに登壇

１　日　程　　10月４日（金）

２　場　所　　銀座メディカルビル９階　スタジオ

３　概　要

10月４日（金）に、社会福祉法人カメリア会・湖山医療福祉グループ、健康と良い友だち社開催の防災・減災セミナーにて、チーム・オレンジ主催「能登半島沖地震における災害救援ボランティア」の報告を行った。自らが体験した内容を多くの方に話し、未だ被災地では多くの課題が残っていることを共有し、被災地への今後の支援について思いを語った。

その後、湖山医療福祉グループ代表 湖山泰成様、地方独立行政法人東京都立病院機構法人本部危機管理統括部長 中島康様、法政大学現代福祉学部福祉コミュニティ学科 水野雅男教授による新しい避難所の提案である「camp in campus」の提案など大地震が発生した時に、最も重要な自分の命を守ることなど、多くの学びを得る機会になった。

ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ　文学部地理学科２年　小林　真聖

４　学生参加者数　２名

５　参加学生の感想

私たちができる防災について、多くの視点から考える機会となった。現地での経験を自らの言葉で伝えることで、自分の思いともう一度向き合うことができたように思う。中島先生からの避難所に関するお話が印象的で、周りを気にせずに堂々と笑える・涙を流せる環境づくりの必要性を強く感じた。さらに水野教授からは camp in campus についてご教授いただいた。日常生活の延長のような、我慢しない避難所生活がこの国の当たり前となるように、私たちも考え、行動し続けたい。

ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ　法学部法律学科３年　後藤　元香

自分たちが体験してきたことを話すという貴重な体験をすることができた。その中で、現地に行く大切さと支援を継続して行うことの大切さを改めて訴えることができたと思う。また、水野教授の camp in campus からたくさんの発見を得られた。避難所という閉塞されがちなものから、フェーズフリーな避難となる取り組みに驚きを感じた。私たちの活動にも取り入れ、今の日本の避難所での生活を、少しでも日常と変わらないものになるようにしていくにはどうすればよいか考えていきたい。

ボランティアセンター学生スタッフチーム・オレンジ　文学部地理学科２年　小林　真聖

セミナーの様子

能登半島沖地震のボランティア活動を報告する学生

45. 手話講座入門編報告書

1　日　程　　10月８日、15日、22日、29日、11月12日、19日、26日、12月３日（いずれも火曜日）

2　場　所　　富士見ゲート６階 G602 教室

3　概　要

市ケ谷ボランティアセンター VSP では、本学学部生を対象とした手話講座入門編を実施しました。手話通訳士としてご活躍されている中野佐世子先生を講師にお招きし、講義をしていただきました。あいさつなど日常会話に使われる基本的な手話を身につけるとともに、聴覚障がいをはじめとする様々な障がいを持つ方々に対する理解を深めることができました。より多くの人々が生きやすい社会をつくるために何ができるのか考えるきっかけになったと感じます。周りの方と実際に手話で会話をしたり、歌に合わせて手話を覚えたりと、楽しい講義をしていただき、全８回の講義を終える頃には基本的な手話や 50 音の指文字を覚え、簡単な会話をすることができるようになりました。第２回と第５回の講座には他大学から聴覚障がいをお持ちの方にお越しいただき、これまでの経験や日常生活について手話でお話をしていただきました。講義で学んだ手話でコミュニケーションをとるなど、とても有意義な時間となりました。参加者の方からは「以前から学びたかった手話を毎週少しずつ学ぶことができ、とてもためになった」や「聴覚障がいや難聴の人を取り巻く現状や問題を知ることができて、非常に学びになった」などといった感想をいただきました。ボランティアセンターでは来年度も手話講座を実施する予定です。

ボランティアセンター学生スタッフ VSP　法学部政治学科１年　柳澤　心李

4　学生参加者数　延べ312名（全８回）

5　企画者感想

全８回の講義を通して少しずつ手話を学ぶことができたのが良かったです。講座を受け始めると手話はひとつの「言語」であるということを実感しました。新しい言語を学ぶという経験は楽しく、英語を学ぶのと同じように、自分の世界が広かったように感じました。手話や指文字を学ぶことができたことも大きな収穫でしたが、さまざまな障がいを抱える方の生活や取り巻く環境などについて学ぶことができたということも自分にとっては大きかったです。より多くの人が生活しやすい社会にするために自分には何が出来るのか考えるきっかけをいただきました。基本的な手話や 50 音の指文字を覚え、簡単な会話をすることができるようになったので今後の生活に活かすことができるよう、これからも学び続けたいです。　　ボランティアセンター学生スタッフ VSP　法学部政治学科１年　柳澤　心李

全８回の手話講座を通じて、手話が言語として持つ魅力や難しさを学びました。最初は手の動きに集中するだけで精一杯でしたが、表情やリズムが大切だと気づき、徐々に楽しくなりました。相手に「伝える」ことの難しさと、「伝えたい」という気持ちの大切さを改めて感じました。また、講座を通じて聴覚障害者の方々の視点や生活への理解も深まり、多様なコミュニケーションの在り方を考える良い機会になりました。　　ボランティアセンター学生スタッフ VSP　法学部政治学科１年　下川　優香

6　参加学生の感想

以前から手話に興味があったけれど、自分で学ぶにはどうしたらいいかわからなかったので、入門として講座を受けてとても面白く充実したものになり、参加してよかったと思いました。手話の成り立ちを知ることで覚えやすく指文字は五十音全て覚えられたので忘れないでおきたいと思いました。また、講座では、手話だけでなく、聴こえない人、聞こえにくい人について学ぶことができてよかったです。私の祖母も難聴で補聴器をつけているのですが、補聴器をしていればよく聞こえているものだと思っていたので、これから祖母と話す時には、ゆっくりはっきり話すようにしようと思いました。これからも手話を学んでみたいと思います。

講義の様子

手話をしながらコミュニケーション

講師の中野佐世子先生

ろう者である学生をお迎えして手話を学びました

向かい合ってお互いの手話を確認する学生の皆さん

集合写真